

カントにおける『教育学』 / 教育学におけるカント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 基貴 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006511

カントにおける『教育学』／教育学におけるカント

“On Pedagogy” by Immanuel Kant / Immanuel Kant in Pedagogy

藤井基貴

Motoki FUJII

（平成23年10月6日受理）

はじめに

教育学の学問的な基礎付けを目指したとされるカント（Immanuel Kant, 1724-1804）は、『教育学』（*Immanuel Kant über Pädagogik, 1803*）において教育の根本的な問題を次のように提起した。

教育のもっとも重要な問題のひとつは、法的強制に服従することと自己自身の自由を使用する能力とをいかにして統合できるのかということである（IX. 453）¹。

上述のようにカントが定式化した「強制と自由」をめぐる問題は、そののち教育における「永遠の問題（eine unsterbliche Frage）」²、あるいは「教育学的アンチノミー（Pädagogische Antinomie）」³と呼ばれ、カント教育思想研究における中心的な課題として論究されてきた。現代ドイツを代表する教育学者テノルトもまた「この問題をカントと関連づけてさらに新しい答えを出そうとするならば、それは哲学と経験的知識との間における近代教育学の分裂を描き出す作業になろう」⁴と述べて、近代教育学における「強制と自由」の問題の重要性を指摘している。

一方、「カントの教育思想にかんする論考で、いわゆる教育をめぐる『自由と強制』の問題に言及していないものはほとんどないといってよい」⁵と指摘される通り、カントの教育思想に関する研究の多くは「自由と強制」の問題に関連づけられ、その意味で研究課題および分析視点が固定化・限定化されつつあるともいえる。

このようなテキスト解釈上のひとつの隘路におちいった背景としては、いくつかの要因があげられる。まず、『教育学』というテキストの「文献学的不確定性」の問題である。周知のとおり『教育学』はカント自身によって書かれた書物ではなく、カントの「教育学講義」を聴講した弟子のリンク（Friedrich Theodor Rink, 1770-1811）が講義ノートをもとに編集刊行したものであった。『教育学』はカントの教育思想をうかがい知る重要な手がかりであるが、同書は一貫した体系、あるいは流れを持ったテキストとして読むことは難しく、カント哲学との内容上の齟齬もいくつか指摘されている。

そのため先行研究においては、カントの教育思想をとらえるには『教育学』を他の著作によっ

て補完して解釈するということが一般的な理解となっている。例えば、ヴィンケルス（Theo Winkels）は「カントの教育学的思索の内容は批判哲学と結びついてはじめて十分に解明されうらと思う」⁶と述べて、批判哲学による『教育学』およびカント教育思想の再構成を試みた。また、日本では山口が「今日教育哲学の問題としてカントを論じるためには、次のような手続きが不可欠となる」として以下の研究上の手続きを示している。

- (1) カント教育論の立論をテーマに関する限りで過不足なく整理すること。
- (2) カントに対する批判を踏まえて、カントの教育思想の問題点を明確化すること。
- (3) カントにおける教育学の方法論的基礎づけの可能性を他の著作を援用して再構成すること⁷。

上述の手続きにしたがって、教育における最大の問題として抽出された「自由と強制」の問題は、『純粋理性批判』における「超越論的自由」および「実践的自由」に関する議論、『実践理性批判』や『人倫の形而上学の基礎づけ』における「道徳的自律的自由」に関する議論とのテキスト内在的連関が問われるところとなり、「自由」の哲学とも呼ばれたカント批判哲学の核心へと収斂していくこととなる。また、同時にこの問題はカントによる「教育学の方法論的基礎づけの可能性」という論点を提起することにもなった。

以上のように『教育学』における「自由と強制」の問題は、教育学におけるカントの貢献を哲学的に検証する際の中心的な論点となってきた。その一方で、近年の研究においては『教育学』を当時の教育思想や時代精神との関連において読み解こうとする歴史学的・書誌学的な研究アプローチも注目を集めている。本論文では、これら先行研究における『教育学』の研究視点を整理検討し、その成果と課題を明らかにするとともに、新たな解釈の可能性を探ってみたい。

1 カントにおける『教育学』

1774年6月13日、カントが在籍したケーニヒスベルク大学に東プロイセン政府から一つの政令が出された。そこには次のように示されていた。

学制の改革に対する大学評議会と学部による申し出の中で提案された「学校実践に関する講義」（Collegium scholastico-practicum）を実現すること。哲学部の教授たちの一人によって公講義で教育学講義を行わせること。……教育学講義が六ヶ月毎に連続して繰り返されること。哲学部の教授陣がお互いに交替で行うように了解しなければならない⁸

これにより哲学部の八人の正教授が輪番で教育学講義を担当し、その講義は学生から聴講料をとらない公講義として開講することとなった。講義の目的は優れた家庭教師および学校教師の養成にあったとされる⁹。カントは論理学と形而上学の正教授であったが、これらの公講義に加えて教育学を1790年度冬学期にこの規則が廃止されるまで四学期にわたって担当した（1776年冬学期、1780年夏学期、1783年冬学期、最後は1786年冬学期）。

また、当時の政府の規定にしたがって、講義においては講義用のテキストを指定しなければ

ならなかった。1776年冬学期に最初に教育学講義を担当した際は、カントは汎愛主義の教育家バーゼドウ (Johann Bernhard Basedow, 1723-1790) の『方法書』 (*Das Methodenbuch für Väter und Mütter der Familien und Völker, 1770*) を指定し、二回目以降は同僚のプロテスタント神学者ボック (Friedrich Samuel Bock, 1716-1785) が執筆した『教授法』 (*Lehrbuch der Erziehungskunst zum Gebrauch für christliche Eltern und künftige Jugendlehrer, 1780*) を指定している。

1774年以前においてケーニヒスベルク大学ではもっぱら神学者が教職者養成に関する講義を担当した。ボックもまた1750年くらいから私講義で教育学の講義を担当していたことを『教授法』のなかで述べている。それが1774年の政令によって、哲学部正教授による輪番制の公講義として再編成される。このことは大学における教職者養成の取り組みが神学者の生業であることを止め、国家による文教政策の一環として位置づけられたことを意味した¹⁰。

カントが『教育学』をみずから執筆できなかった事情としては、講義を担当していたおよそ10年間に多忙な時期と重なっていたことがある。当時の『講義要項』で確認すると、この時期のカントは週平均14コマの講義を担当しており、同時に15篇の論文と代表作『純粹理性批判』、『実践理性批判』を含む7冊もの著書を発表している。カント自身執筆した最後の著作は1798年に出版された『実用的見地における人間学』であった。同書は人間学の講義をもとにまとめたものであったが、教育学や自然地理学の講義内容についてはみずからの手でまとめることは叶わなかった。リンクは『教育学』の「編者の序言」において次のように説明している。

この教育学講義の覚え書きは、かりにその講義時間が実際にそうであったほど短縮されずに十分な分量だけ割り当てられ、しかもカント教授がこのテーマについてさらに議論を展開して、いま以上に詳しく書き残す機会を何らかの仕方で見出していたとしたら、おそらく一段と興味深いものになって多くの点でより詳細に論及されたものになっていたであろう (IX. 435)

『教育学』の講義資料がリンクのもとに渡るまでには、同講義の最終講義から10年以上の歳月が経っていた。もともとカントは講義のために自分が用いた資料を他人に渡すつもりはなかったとされる。カントは1791年に作成した遺言書草案の中で、自分の原稿類を他人が利用することを禁じている。その理由はみずからの学説の誤読が生じるのを恐れたためと伝えられている。そのため弟子の一人であるゲンジヘン (Johann Friedrich Gensichen, 1759-1807) が原稿類の管理を任せられ、自分の死後はそれを廃棄することまで書き添えられた¹¹。

しかしながら、その後カントの原稿類は一つの哲学論争をめぐって再び活用されることとなる。1799年、ヘルダー (Johann Gottfried von Herder, 1744-1803) が『純粹理性批判のメタクリティーク』を公刊し、カントの『純粹理性批判』への批判を展開した。当時のカントはすでに75歳に達しており、視力の衰えなどの老化現象も進んでいたため、これに反論するために筆をとるほどの体力および気力が残っていなかった。そこで翌年、やむなく彼は論争に関連する原稿類をリンクとイエッシェ (Gottlob Benjamin Jäsche, 1762-1842) に託し、これを閲読させ、その仕事を代わりにさせることにした。リンクは指示に従って、原稿類をまとめ、同年に『メタクリティークによる侵略史への雑録』というヘルダーへの反論書を出版している¹²。

こうした経緯によって、生前にカントの講義ノートの幾つかがリンクの手に渡り、出版され

ることとなった。そのことを裏付けとして、カント自身もフォルマー社による『自然地理学』の出版に関する抗議文の中で、次のように述べている。

講義ノートについて私はフォルマーが刊行するのではないかと疑念している『論理学』も『道徳学』も、また他の著作も、自分のものと認めることはできない。なぜなら、自分のものは、すでに私からマギスター・イエツェとリンク博士に任せてあるのだから。ケーニヒスベルク 1801年5月29日 (XII 372)

また、原稿類を譲り受けたリンクは『メタクリティークによる侵略史への雑録』の序文において以下のように述べている。

最後に、批判哲学の仲間であり、これを敬慕する人々に興味ある報告をしたいと思う。それは我々の尊敬するカント教授のご厚意によって、イエツェと私は、教授の形而上学……論理学、自然神学、自然地理学、それから他の興味ある著書を漸次出版することである¹³。

ここに記されている「他の興味ある著書」のなかに『教育学』が含まれることとなった。

1803年にリンク版『教育学』は出版される。同書は数多くの教育学者および哲学者たちから関心を集め、さまざまな視点から考察が深められてきた。また、カント哲学に関する研究が進展していく中で『教育学』も幾度となく再版され、同時にリンク版に対する文献学的考証も進められる。しかしながら、リンクが編集材料とした草稿類は、今日までのところ発見されておらず、『教育学』の内容構成上の問題はリンクによるものなのか、果たしてそうでないのか、いまだに解決をみていない。そのため先行研究ではカントの批判哲学との内的連関を問いつつ、『教育学』で示された内容の成立時期をめぐるさまざまな解釈がなされてきた。

2 『教育学』の分析視点

『教育学』の内容の成立時期についての先行研究の解釈および評価は次の二つに区分される。

第一の解釈は、『教育学』の成立時期を前批判期に位置づけるものである。たとえば、シュール (Johannes Schurr) は「カントの教育学講義は、批判書の精神にまったく基づいておらず、むしろルソーの影響を受けた汎愛主義という前批判期的な思想である」¹⁴と述べている。また、ヴィルマン (Otto Willmann) も批判哲学との連関が見いだされないとして、『教育学』の内容は批判期には属しないと結論づけた (IX 569)。日本でも教育学者の村井実が同様の理解を示している¹⁵。これらの研究に共通するのは、カントの教育思想はルソーやその影響を受けたバーゼドウといった同時代の教育家の思想に影響を受けた、独創性の乏しい思想にすぎないという消極的な評価である。

これに対して、第二の解釈は『教育学』の内容を批判期の著作と関連づけて、その積極的な意義を認めようとするものである。代表的な研究としては、リートケ (Max Liedtke)、リッツェル (Wolfgang Ritzel)、ヴィンケルス、村田優子、山口匡、鈴木晶子、俵木浩太郎が挙げられる¹⁶。これらの立場に共通なのは『教育学』の内容を『純粹理性批判』、『実践理性批判』、『判断力批判』などに主要著作によって補完し、その意義を定めようとする点である。なかでも、プ

ライネス (Jürgen Eckardt Pleines) が編集した論集『カントと教育学』においては「教育学の学問的基礎付けの可能性」をめぐってカント批判哲学の教育学意義を問い直すという論点が示された¹⁷。

上述の二つに大別される研究は、後者が主流になりつつあるとはいえ、いずれも基本的には『教育学』の「文献学的不確定性」の問題を、「強制と自由」の問題も含め、カントの批判哲学に主軸をおき、その内的連関を明らかにすることで克服しようとするものである。

上述の研究動向をふまえた上で、『教育学』の新たな解釈可能性を問う上で改めて重要となるのは次の二つの研究成果であろう。第一はシュヴァルツ (Walther Schwarz) がまとめた『教育者としてのイマヌエル・カント』 (*Immanuel Kant als Pädagoge*, 1915)¹⁸であり、第二はヴァイスコップ (Traugott Weisskopf) がまとめた『イマヌエル・カントと教育学』 (*Immanuel Kant und die Pädagogik*, 1970)¹⁹である。これらの研究は『教育学』を大学史および思想史の文脈から読み解く手がかりを提供している。

第一の、シュヴァルツがまとめた『教育者としてのイマヌエル・カント』の重要性は、ケーニヒスベルク大学の教育学講義に関する史料、すなわち政府の政令文書や、大学評議会の応答文書、議事録などを数多く収めているところにある。これらの史資料は戦禍によって現在では所在が不明となったものが多く、シュヴァルツ以上の新たな史実を見いだすことは困難であると考えられてきた。実際に先行研究でも教育学講義の開設および『教育学』の刊行に関する歴史的な経緯についてはシュヴァルツの示した理解がそのまま採用されてきた。日本では1936年に木場深定がシュヴァルツの成果に基づいて『教育学』の訳者解説(「解題」)を記し²⁰、それがこれまでの研究上の基本理解をなしてきたといつてよい²¹。

第二の、ヴァイスコップの研究は『教育学』の詳細なコメンタールを作成して、それがカントの著作や同時代の教育関係図書とどのような対応関係にあるのかを考察したものである。同書は700頁にもおよぶ大著であり、『教育学』の各パラグラフとルソーの『エミール』およびバゼドーの『方法書』との対応関係が詳細に検証され、『教育学』の内容的独自性およびリンクの編集手腕が厳しく批判されている(「ヴァイスコップのテーゼ」)。後発の研究は「ヴァイスコップのテーゼ」の「スケールの大きさ」を認めつつも²²、同テーゼは『教育学』を批判哲学によって補完することで乗り越えることが可能であるという認識を示し、その認識を承認、共有してきた。

「ヴァイスコップのテーゼ」²³

仮説①：『教育学』の一部は、カントの倫理学講義の原稿からできている。

仮説②：『教育学』の一部は、カントの人間学講義の草案からできている。

仮説③：『教育学』の一部は、ルソーの『エミール』の引用からできている。

仮説④：リンクは『教育学』のほとんどすべての箇所を校訂を加え、異なった部分であっても全体に対する判断に基づいて一緒にしてしまっている。

これら二つの研究がもたらしたのは『教育学』の歴史学的な分析(シュヴァルツ)と書誌学的な分析(ヴァイスコップ)についての研究史における一つの到達点であり、『教育学』を読み解くための前提理解でもあった。その一方で、シュヴァルツの研究はプロイセン政府による学制改革と教育学講義の開設との関係や、カント以外の哲学部正教授による教育学講義の開

講状況等については説明されておらず、『教育学』の歴史的な分析を進める上で解明すべきいくつかの史実の検証作業が残されていた。また、ヴァイスコップフの研究は1970年に出版されたものであるため、それ以降に発掘されたカントの講義録等の史料については活用されていない。そのため近年ではこれらの研究成果を補完し、また再評価する研究が進められている。

まず、歴史学的な分析としてはポッツォおよびオイラーらの研究が注目される。大学史家ポッツォはカントが在籍したケーニヒスベルク大学の『講義要項』を復刻出版し²⁴、当時の大学制度およびカリキュラム内容についての分析を行っている。オイラーは大学史関連の史・資料からカントが変革期の大学のなかで教員養成の取り組みに携わり、「教育の近代化」においても重要な貢献を果たしたと指摘する²⁵。これらの研究成果をふまえて、藤井はケーニヒスベルク大学の史・資料を所蔵するベルリンプロイセン文化財団枢密文書館（Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz Berlin）での史・資料の発掘および分析から、シュヴァルツの提示した史実を補完・検証するとともに、教育学講義の開講と政府による「教育の近代化」政策との関連づける史料的な裏付けを進めてきた²⁶。こうした研究成果により『教育学』の内容をドイツにおける「教育の近代化」との関連で読み解くという分析視点が示されることとなり、日本では加藤、渋谷、大森らが『教育学』における「世界市民主義」的教育思想の意義について新たな解釈を試みている²⁷。

また、シュタルク（Werner Stark）は論文「講義－遺稿－印刷物？－教育学についてのカントの覚え書き－」においてヴァイスコップフの研究を次のように評価している。

私はヴァイスコップフの研究を視野に入れると、誤解を避けるために、はっきりしておきたいことがある。それは心から彼の研究に感心し、事柄についての彼の考えとかなり多くの点で一致しているということである。私の意見も、リンクによって編集された『教育学』は、完全な言葉の意味において、このケーニヒスベルクの哲学者の著作としてみなされてはならないし、利用されることが許されないということである。むしろ完全な新しい学術的な版が作成されるべき時であると思う。それはテキスト分析についての現代の電子機器と人間学の講義録の版の成果に基づくべきである²⁸。

シュタルクは、ヴァイスコップフが示した『教育学』と『人間学』および『教育学』と『倫理学』との関係を重視し、1997年に出版された『人間学講義録』や近年のカント著作集のデータベースを利用して、教育に関するカントの思想が書かれたものを集積して、新たな『教育学』を編集することを提案している。また、カントの著作においてほとんど使われてない“anbetreffen”といった言葉を『教育学』のなかで抜き出すことにより、リンクがどのようにもとの原稿類を自分の言葉で編集したのかを明らかにしようとする書誌学的な分析視点も示した。

前述のとおり、『教育学』をカントの批判哲学から読み解こうとする研究においては、ヴァイスコップフの研究は「仮説に過ぎない」とみなされ、批判哲学による補完を促す研究成果として位置づけられてきた²⁹。これに対し、シュタルクの指摘に従えば、これまでに公刊されたカントの全著作と『教育学』とのターミノロジーに関する分析、当時の教育関係図書との文献比較的分析は新たな『教育学』解釈を進めるにうえて有効な分析視点を提起するものとなる。ヴァイスコップフの研究の本来のねらいは、リンクの編集手腕を批判することにあつたが、彼

の研究成果は『教育学』が他の著作や同時代のどのような教育問題と対応しているのかを明らかにする重要な手がかりとしても再評価することができるだろう。

加えて、カントの『教育学』は「教育の近代化」および「教育の脱教会化」のプロセスのなかで生成されたテキストでもあった³⁰。そのことを考え合わせるならば、『教育学』のなかに教育における神学的な概念の克服過程を読み解くこともできよう。そのとき先行研究ではあまり注目されてこなかった神学者ボックの『教授法』と『教育学』とを比較検討することは重要な意味を持つこととなる³¹。

3 教育学におけるカント —もう一つの分析視点—

今後、『教育学』の歴史学的な分析および書誌学的な分析が進展することによって、『教育学』およびカントの著作における教育に関する記述について研究の進展が期待される。これに加えて、もう一つの分析視点を示すとすれば『教育学』の影響作用史の分析があげられる。

ドイツの教育学者で、ドイツ教育学会会長も務めたディーター・レンツェン (Dieter Lenzen) は、戦後ドイツにおける教育学理論の発展史をまとめ、1980年代に展開された教育科学理論の多元化をドイツ精神史と結びつけて四つのカテゴリーを示した。それらは「唯物論的教育学」、「精神分析的教育学」、「現象学的教育学」、「実践学的教育学」に分類されている。ここでそれぞれの思想的起源として挙げられているのがマルクス、フロイト、フッサール、カントであった。カントについては「Kant 1803」と記されており、『教育学』の出版年まで併記されている³²。

レンツェンによれば「実践学的教育学」の構築を目指したとされるベナー (Dietrich Benner) らは、カントにまで遡って「教育実践と教育科学的理論形成の基礎付け」を試みた。具体的には「創造的自由へ向けて決定可能性としての人間の陶冶可能性」、「自己活動性の要求」、「社会的な決定を教育学的決定のなかに置き換えること」、「人間の実践すべてをより高次の人類の発展という目標に向けて集中させること」の四つの原則を設定し、教育学の学問的な復興を企図した³³。

たしかに「実践的教育学」派の示した四原則についてカントの『教育学』にそのエッセンスを求めることは不可能ではない。しかしながら、わずか2万文字あまりの『教育学』を引き合いに出すまでもなく、こうした理解は一般的に近代教育学の基本テーゼとして共有されたものともいえる。また、日本においても教育の必要性や教育可能性といった教育学上の課題が検討されるとき、頻繁にカントが引き合いに出される。『教育学』自体もこれまでに八種の邦訳書が出されており、カントの講義録のなかではひときわ高い関心を集め続けてきたテキストとして知られている³⁴。国内外の教育学におけるこのようなカントへの関心は、『教育学』の内容および「文献学的不確定性」の問題を鑑みると、いささか奇妙にもうつる。

このことは、『教育学』というテキストが教育における近代問題を読み解くための審級としての地位を与えられてきたと捉えることもできる。『教育学』がどのように受容され、どのような影響を与え、またどのように評価されてきたのかを問うこと、換言すれば『教育学』の解釈学的な分析を行うことは近代教育学の言説構造を歴史的に解明するとともに、教育学の学説史におけるカント哲学の役割を検証する作業ともなるだろう。

こうした問題関心に即していえば、日本においてカント哲学が新カント派を經由して受容さ

れた点にも注目したい。教育学においてもヘルバルトやデューイよりも後に新カント派の影響下でカントが受容されることとなった。戦後教育学において重視された「人間性の完成」、「人格の完成」、「発達概念」といった諸概念の形成過程が、このような受容史とどのように関連付けられるかを問うことは教育学におけるカントの位置づけを見通す上でも重要な論点となる。この問題について、たとえば高田はカントの『教育学』における「人間性の完成」の理念を丁寧分析し、日本の教育基本法に示された「人格の完成」の概念とカント主義とを短絡的に結びつけてきたこれまでの理解について「カントの思想の一面化、歪曲化」として批判している³⁵。また、『教育学』への解釈学的分析の手がかりとして、訳語の変遷からカント教育思想の影響作用史を考察しようとする研究も進められている³⁶。同様にして、世界各国で翻訳されてきた『教育学』の受容史とその特徴について国際比較的分析を加えることも、カント教育思想研究の新たな展開可能性を示すものとなるだろう。

おわりに

近年、カント研究の中心軸は理論哲学から実践哲学に比重を移しつつある。具体的には道徳哲学、政治哲学、美学の文脈からカントを再評価する動きが進められている。そのため批判期の著作のなかでも『啓蒙とは何か』、『永遠平和のために』、『判断力批判』といった著作への関心が国際的に高まっている。こうした動向はまたカント研究においては周辺的なテキストとしてみなされてきた『教育学』への関心をも呼び覚ましている。

日本においても、ここ数年にわたって教育哲学会およびカント学会において、カントの『教育学』についての研究発表が続いている。また、本論文の執筆中にはアメリカのルートリッジ社から論文集『カントと教育—解釈と注釈』が公刊された³⁷。同書は16本の論文から構成されており、そのうち半分の8本が「道徳性」や「道徳教育」に関わるものであり、3本がバーゼドゥ、ルソーの教育思想や啓蒙主義との関係を問うものであり、残りは『教育学』の内容とカントの実践哲学との関係を考察したものとなっている。同書の内容的な紹介および分析は別稿にゆずるとして、これらの研究成果が『教育学』の「文献学的不確定性」の問題をどの程度克服しているのか、またドイツや日本での議論に比して、どのような解釈可能性を示しているのか国際比較的分析が今後の課題となろう。

『教育学』の出版以来、カントの教育思想の内容と特徴については長い間さまざまな議論が続けられてきた。これに対して、教育学の学説史に埋め込まれたカントの存在意義、アクチュアリティを問い直す作業はまだはじまったばかりである。

-
- 1 カントの著作からの引用については、アカデミー版カント全集の巻数をローマ数で、頁数をアラビア数字で付記する。訳出にあたっては『カント全集』（岩波書店）を使用する。
 - 2 Miller-Kipp, Gisela, 1992, "Wie kultiviere ich der Freiheit bei dem Zwang?" Pädagogische Antworten auf eine unsterbliche Frage, historische durchgesehen, *Freiheit und Kontingenz. Zur interdisziplinären Anthropologie menschlicher Freiheiten und Bindungen*, S. 267.
 - 3 H. Hermann, 2001, Kant als Erzieher. *Kant und die Berliner Aufklärung*, IX, S. 39-46.

- 4 Tenorth, Heinz-Elmar, Kant in der Pädagogik, Jahrbuch für historische Bildungsforschung, 10, S. 342.
- 5 山口匡, 2005, Wie kultiviere ich der Freiheit bei dem Zwang?—カント『教育学』における内在的解釈の視点, 愛知教育大学研究報告, 54, 91頁.
- 6 Winkels, Theo, 1984, *Kant Forderung nach Konstitution einer Erziehungswissenschaft*, S. 55.
- 7 山口匡, 1995, カントにおける教育学の構想とその方法論的基礎—理論 = 実践問題と『judiziöz』な教育学—, 教育哲学研究, 71号, 74頁.
- 8 Arnoldt, Emil, 1909, *Gesammelte Schriften, Bd.5*, S. 239.,
- 9 Johann Friedrich Goldbek, 1782, *Nachrichten von der Königlichem Universität zu Königsberg in Preußen*, S. 34.
- 10 このことについては藤井基貴, 2007, 18世紀ドイツの大学における教育学講義の開設—ケーニヒスベルク大学に注目して—, 大学史研究, 22号, 2-23頁を参照のこと。
- 11 Schwarz, Walther, 1915, *Immanuel Kant als Pädagoge*, S. 59.
- 12 Ebenda, S. 60.
- 13 Rink, Friedrich Theodor Rink(hrsg.), 1800, *Mancherley zur Geschichte der metacritischen Invasion, Königsberg*, Vorrede, XIX-XX.
- 14 Schurr, Johannes, 1974, Zur Möglichkeit einer transzendentalen Bildungstheorie, *Vierteljahrschrift für wissenschaftliche Pädagogik*, 50, S. 355.
- 15 村井実, 1976, 教育学入門, 上巻, 講談社, 56頁.
- 16 Liedke, Max, 1967, Anmerkungen zu H. J. Ipflings "Anmerkungen über die wissenschaftstheoretische Grundlegung der Pädagogik bei Kant", *Pädagogische Rundschau*, 3, S. 165-169, Ritzel, Wolfgang, 1985, Wie ist Pädagogik als Wissenschaft möglich?, *Kant und die Pädagogik*, S. 37-45, Winkels, Theo, 1984, 村田優子 1994 カントの教育思想における「訓練」(Disziplin) 概念の考察—自律的訓練と他律的訓練—, 人間発達研究, 19, 19-25頁, 山口匡, 前掲書, 1995, および2005, 鈴木晶子, 1994, カントの教育学, 現代思想カント, 22巻4号, 332-341頁, 俵木浩太郎, 1974, カント『教育学』における「批判」的方法, 教育哲学研究, 30号, 16-29頁.
- 17 Jürgen-Eckardt Pleines(hrsg.), 1985, *Kant und die Pädagogik*.
- 18 Schwarz, Walther, 1915.
- 19 Weisskopf, Traugott, 1970, *Immanuel Kant und die Pädagogik*.
- 20 木場深定, 1936, カント著作集, 17巻, 岩波書店, 7-42頁。
- 21 たとえば、『教育学』の訳者である清水清は訳注のところで木場深定の「解題」から引用したと記している。(清水清, 1959, カント人間学・教育学, 435頁.) また、尾渡達雄および伊勢田耀子の木場深定の解説を引き継いだものと推定できる。(尾渡達雄, 1966, カント全集, 16巻, 理想社, 557-560頁, 伊勢田耀子, 1971, 教育学講義他, 明治図書, 171-173頁.)
- 22 H. H. グロートフ, 1992, カントにおける哲学の組み合わせの基礎づけとその問題性, 現代ドイツ教育学の潮流, 玉川大学出版部, 208頁.
- 23 Weisskopf, Traugott, 1970, S. 239-330.
- 24 Riccardo Pozzo (hrsg.), 1996, *Vorlesungsverzeichnisse der Universität Königsberg 1720-*

1804.

- 25 Euler, Werner 1994, „Immanuel Kants Amtstätigkeit. Aufgaben und Problem einer Gesamtdokumentation“, *Kant-Forschungen*, 5, S. 58-90.
- 26 藤井基貴, 2006, 18世紀ドイツ教育思想におけるカント『教育学』の位置づけ, 日本カント研究, 7号, 153-168頁.
- 27 加藤泰史, 2007, 理性批判と公共性の問題, 西洋哲学史再構築試論, 昭和堂, 264-331頁, 渋谷治美, 2007, カントと愛国心批判, 日本カント研究, 8号, 71-84頁, 大森一三, 2011, カント教育論における自由と開化のアンチノミー, 日本カント研究, 12号, 193-209頁.
- 28 Stark, Werner, 2000, Vorlesung-Nachlass-Druckschrift? Bemerkungen zu Kant über Pädagogik, *Kant-Studien*, vol.91, S. 94-105.
- 29 Louden, Robert, B, 2000, *Kant's Impure Ethics*, p. 34.
- 30 藤井基貴, 2006.
- 31 この課題については2008年に教育史学会にて報告を行った。近年中に論文としてまとめ公刊する予定である。
藤井基貴「カントの啓蒙主義的人間形成論—ボック『教授法』(1780年)との比較を通して」教育史学会, 2008年9月21日, 於 青山学院大学
- 32 Lenzen, Dieter, 1993, *Erziehungswissenschaft Ein Grundkurs*, S. 27.
- 33 ベナーらの試みはドイツにおける理論多元化を克服するモデルとしての地位を獲得することはなかったが、レンツェンは啓蒙主義によって失われた前近代的な教育の在り方やその価値を辿る際の参照軸として注目する。Lenzen, Dieter, 2001, *Erziehungswissenschaft in Deutschland. Theorien, Krisen, gegenwärtiger Stand, Wie kommt Wissenschaft zu Wissen? 4. Einführung in die Wissenschaftstheorie und Wissenschaftsforschung*, S. 302-311.
- 34 このことの詳細については以下の文献を参照のこと。藤井基貴, 2010, カント『教育学』翻訳考, 西洋近代と日本の近代化—教育文化交流史研究一, 大学教育出版.
- 35 高田純, 2007, カントの教育学講義—「自然素質の調和的発達」をめぐって, 札幌大学外国語学部紀要, 67, 181-241頁.
- 36 藤井基貴, 2010.
- 37 Roth Klas and Surprenant Chris (edited), 2012, *Kant and Education Interpretations and Commentary*.